

陳春生『伊朔譯評』に見られる宗教性の諸相

喬 昭

Aspects of Religion as Seen in Chen Chunsheng's *Yishuo yiping*

QIAO Zhao

Abstract

All 199 episodes in *Yishuo yiping* are part of the Chinese translation of *Aesop's Fables* and were published in the first year of Xuantong(1909). *Aesop's Fables* is a collection of Greek fables, some of which became religious parables during the Middle Ages in Europe. *Yishuo yiping* consists of the title, the content of the fables, and critiques(comments). The orderly structure is a characteristic of *Yishuo yiping*, and compared to other Chinese translations of *Aesop's Fables*, the content is easy to understand, and the combination of fables is obvious. This paper studies the religious aspects and enlightenment in Chen Chunsheng's translation in detail, from the title to the content of *Yishuo yiping*. First of all, as is well known, the Chinese translation of *Aesop's Fables* is called *Yisuo yuyan*. The title of another famous translation is *Yishi yuyan*. Why is the title *Yishuo yiping* not derived from the pronunciation of a dialect such as is *Yisuo* or *Yishi*? I consider the religious expressions in *Yishuo yiping*, and through a full analysis, I point out the characteristics of religion and enlightenment in Chen Chunsheng's translations found in *Yishuo yiping*.

Keywords : 伊朔譯評、漢訳イソップ、陳春生、寓話、宗教性

はじめに

イソップ寓話はギリシャの物語、或いは寓話集であり、アイソポス (Aesop 即ちイソップ)¹⁾ が作ったとされる寓話を集めた寓話集である。本稿では漢訳イソップの一つである『伊朔譯評』²⁾ について考察する。

『伊朔譯評』は宣統元 (1909) 年に上海協和書局から出版されたものであり、『伊朔譯評』はタイトル、寓話と教訓からなる。整然とした形は『伊朔譯評』の特徴であり、他の漢訳イソップ寓話集と比べると、寓話の内容がわかりやすく、寓話の構成法が一目瞭然である。さらに、『伊朔譯評』は寓話数も多く、全部で199話ある。周知の通り、イソップの漢訳版の中国語名といえば、「伊索寓言」である。「意拾喻言」という名前も有名である。しかし、『伊朔譯評』はイソップの音訳「伊索」でも、もしくは「意拾」³⁾ のような方言の発音でもなく、なぜそのような名付けられたのか定かではない。よって、本稿は「伊朔」という名前の由来を明らかにし、さらに『伊朔譯評』における宗教的な表現を検討したい。全面的な分析を通じて、陳春生の翻訳における宗教性と啓蒙の特徴を明らかにすることが本稿の最終的な目標である。

一、陳春生と『伊朔譯評』

1. 陳春生「知白子」について

『伊朔譯評』の編訳者である陳春生についての研究は少なく、陳の人物像に関して現時点では不明な点が多い。陳春生は「知白子」と自称する。老子の言葉に「知其白、守其黒、爲天下式」という教えがあり、白 (輝き) を意識し、なお黒 (暗さ) を保つその人は、天下の範となる、という意味である。「知白」が「清廉潔白を知る」こと、「守黒」が「世の中に関わる」ことを意味する。世間の汚濁や誘惑にあっても、清廉さを保つ中に徳が増していくと言う事である。白を知り、黒を守る。雄を知り、雌を守る。何かを成すにあたり、その一点だけではなく客観的に、全体的に視点を置き、事に処せよ、という事だろう。また、「知白守黒」と「知白守墨」は、書法においては、文字、余白のバランスの良否 (良し悪し) を言い、大事な概念として捉えられている。すなわち、バランスは大事である、ということである。

そして、『伊朔譯評』は各話の後ろに「知白子曰」で始まり、評論または教訓が記されている。さらに、書物だけではなく、陳春生は映画分野でも「知白子」と自称する。映画台本の編

1) アイソポス (B.C.619-B.C.564年ごろ) は古代ギリシャの寓話作家である。また、奴隷だったと伝えられる。英語の「AESOP」を指している。

2) 陳春生『伊朔譯評』(上海協和書局、1909年)。

3) “意拾”は「イソップ」の広東語による音訳である。

集者として、1924年3月に上映された『大義滅親』⁴⁾のメインクリエイターリストの中にも「知白子編」と書いてある⁵⁾。周知の通り、老子は道家思想の代表であるが、「知白子」の自称から見ると、陳春生は老子の道家思想に影響を受けていたと考えられる。

2. 漢訳イソップにおける『伊朔譯評』

中国におけるイソップの中国語訳の嚆矢は、明代のベルギー人宣教師ニコラ・トリゴー(Nicolas Trigault)⁶⁾が口述した『況義』である。この『況義』の原本については未解明な状態であり、現在判明したことはパリ国立図書館やオックスフォード大学ボドリアン図書館に所蔵されている4つの写本がある。その後、1840年にロバート・トーム⁷⁾(英: Robert Thom、中: 羅伯聃)の『意拾喻言』、1903年に林紘訳の『伊索寓言』が続く。更に20世紀前半には中国風イソップも現れていた。本論の主題とした作品の作者である陳春生が著した『東方伊朔』(1906年)がその代表である。

現在、イソップ寓話集と呼ばれるものには、アイソーポスのものだけではなく、それ以前から伝承されてきた古代メソポタミアのもの、後世の寓話、アイソーポスの出身地とされる民話を基にしたものも含まれている。アイソーポスが作ったギリシャ語の原典があったのかは確認できず、現存するギリシャ語イソップ集はその後世に編集された寓話集である。また、現在の寓話は、これらの古典的寓話集が、ギリシャ語やラテン語を解したキリスト教の学者によって受継がれ、中世ヨーロッパでのキリスト教の価値観を持った寓話をさらに含み、単なる娯楽的な寓話から教訓や道徳をしめす教育的な意味を付加されている。

『伊朔譯評』について、陳春生が主筆を務めた『通問報』⁸⁾の第一千二百二十三回、「首論」に次のようにある。

傳道人留意你的器具

凡人讲道或演说，如逼直说理，未免枯燥无味，倘于讲论时，用短篇故事，或寓言一二段，不独使听者起兴且能使讲义愈加明瞭 本馆前出之「东方伊朔」「伊朔译评」「新日记故事」多再版十多次，销行数万册，皆传道人必用的良器具也。因该书皆是极有趣味之故事，及寓言也。

上海北四川路协和书局发行

4) 黄德泉『当代電影』(中国電影芸術研究中心、100082號)、61頁。

5) ここでの「知白子」についての考察は喬昭「陳春生の生涯と著作」(『東アジア文化交渉研究』第14号 249-264頁)を参照。

6) ニコラ・トリゴー(1577-1628)は北フランスのドゥエー出身のイエズス会士であり、神父でもある。中国語の名前は「金尼閣」である。

7) ロバート・トーム、またトム(1807-1846)はイギリスの外交官であり、中国語研究者である。代表作として『意拾喻言』を著し、1840年に出版されたという。中国語の名前は「羅伯聃」である。

8) 『通問報』はキリスト教の宣教物であり、『中国基督教情報員』とも呼ばれている。

『伊朔譯評』は1909年に初版され、その後十何回も再版したものである。『意拾喻言』は目次から序文、各寓話の順番になっているが、それに対し、『伊朔譯評』は序文の次に目次、各物語の順番からなっており、『伊朔譯評』は序文から始まっている⁹⁾。また、『意拾喻言』の序文は英語、漢字、またはローマ字（広東語の発音表記）といった三種類の言語で書いあったが、『伊朔譯評』の序文は漢字だけであった。さらに、『伊朔譯評』収録の寓話は全て四文字のタイトルであることにに対し、『意拾喻言』のタイトルの文字数は統一されていない。四文字タイトルの場合もあるが、二文字、三文字、さらに五文字のタイトルもある。一方、同じ作者による『東方伊朔』についても四文字タイトルで151話からなっている。『伊朔譯評』と同じように、『東方伊朔』も序文からタイトル、続いて各寓話の順番で展開されている。しかし、『伊朔譯評』と『東方伊朔』は同じタイトルの寓話が一話もない。同じ「伊朔」の名前を使っているが、全く異なる寓話集である。また、寓話のタイトルの構成を見れば、『伊朔譯評』は『東方伊朔』より平明でわかりやすい。

二、『伊朔譯評』における宗教性の諸相

1. Aesop/イソップを「伊朔」と翻訳した理由

さて、本稿は陳春生が編訳した『伊朔譯評』に関する研究である。まずここでは、イソップを「伊朔」と訳した理由を見ていく。イソップの漢訳版の通称は「伊索寓言」あるいは、「意拾喻言」である。では、『伊朔譯評』の「伊朔」はイソップの音訳「伊索」でも、もしくは「意拾」のような方言の発音でもないのだろうか。

筆者の調査により、天理図書館に所蔵されている『伊朔譯評』（第二版）には英語の序文が存在していることがわかった。季理斐（英：Donald MacGillivray、日：マクギリヴレイ、1862-1931）署名の「PREFACE TO AESOP'S FABLES」である。季理斐はカナダ人宣教師であり、1888年にカナダ長老派協会から中国に派遣され、1899年に上海広東協会の編集者を務めた。そして、1921年に協会の理事長を務め、1930年に病気で中国を離れた後、イギリスで亡くなった。また、季理斐は、代表作として『基督教新教在華傳教百年史』（A Century of Protestant Missions in China, 1807-1907）などの本を執筆した。

カナダ人宣教師である季理斐は『伊朔譯評』の最初の序文を以下のように書いた。

Mr. Chen recently published a book of purely Chinese fables, and called it the "Tung Fang I So." The latter two characters make Aesop, and the first two may be translated Eastern, that is, the Eastern Aesop. The name was cleverly based on Tung

9) 喬昭「イソップにおける「西学東漸」—『伊朔譯評』と『意拾喻言』の対比から」（『文化交渉：東アジア文化研究科院生論集』第10号、2020年）、63-79頁。

Fang So, 東方朔, a famous Chinese, born B.C.160. This book has been in great demand by foreigners and Chinese, and doubtless this new venture of his will be equally successful. As is well known the Easterners are exceedingly fond of fables (寓言), apologues, and comparisons in general. Dr. A. H. Smith, pages 283-288, in his "Proverbs," and Dr. Martin in "The Lore of Cathay," quote a few examples, but I strongly advise the missionaries to get the "Tung Fang I So," and this present book of Aesop's fables, and they will be sure to find much material to help them in preaching to the Chinese.

(拙訳：陳氏は最近、純粋な中国の寓話本の『東方伊朔』を出版した。最初の二文字はオリエンタル（東方）、後半の二文字はイソップを意味する。つまり「東方イソップ」と翻訳できる。この名前は、B.C.160生まれの有名な中国人、東方朔の「Tung Fang So」に基づいている。この本は、外国人及び中国人に必要な書籍であると彼（陳）は疑わず、この新しい挑戦をし、大きな成功を収めている。周知のように、東洋人は一般に寓話（寓言）、アポログ、及び一般的な比較文学などを非常に好む。これらについてはA. H. スミス博士のProverbs（『箴言』）のページ283-288、およびマーティン博士（丁韞良）のThe Lore of Cathay（『漢學菁華』）でいくつかの例を引用しているが、私は宣教師にこの現代版イソップ寓話である『東方伊朔』を入手しようと強く勧めている。ここには、彼らが中国人に説教をする際に使用すべき、多くの資料を必ず見つけられると思う。）

このように明瞭に「伊朔」について説明している。つまり、陳春生は「東方朔」という人の名を借り、中国版イソップの名前を命名した。東方朔は紀元前154年-紀元前93年の人であり、前漢の武帝時代の政治家として非常に有名な人物である。そして、唐代の詩人李白は彼のことを「世人不識東方朔、大隱金門是謫仙」¹⁰⁾と褒め称えている。また、滑稽な行為をすることでも知られ、中国では「相声」などのお笑いの神様として尊敬されている。

この序文の内容により「伊朔」と「東方朔」の関わりは明らかである。では、陳春生はなぜ「東方朔」を引用して題名としたのかをこれから分析したい。

『史記』第66「滑稽列傳」の中に東方朔の経歴が残され、筆者の調査によれば、田岡佐代治が訳注した『和譯史記列傳』の下巻、「滑稽列傳第六十六」¹¹⁾には以下のように述べられている。

武帝の時、齊人に東方生、名は朔なるものあり。古の傳書を好み経術を愛するを以て、博く外家の語を觀る所多し。朔初め長安に入り、公車に至って上書す、凡そ三千の奏牘を用ふ。公車、兩人をして共に持して其書を挙げしむ。僅然て能く之に勝ふ。人主、上方より之を読んで止めば、輒ち其處に乙し、之を読む二月、乃ち盡く。詔し拜して、以て郎と

10) (唐)李白『玉壺吟』唐玄宗天寶三載(744年)。

11) 田岡佐代治著『和譯史記列傳』下巻、玄黄社、明治44(1911)年、441-442頁。

成なす。常に側に在り中に待す。(中略) 時に詔して之に食を前に賜ふ。飯し已れば、盡く其餘肉を懷にして、持し去る。(中略) 人主之を聞いて曰く、朔をして事に在らしめば、是の行を為す者無けん。若等、安くんぞ能く之に及ばんと。朔、其子を任じて郎となし、又侍謁者になり。常に節を持し出でて使す。

これによると東方朔は博学多才な人物であり、武帝から高く評価されていた。また、他にも伝説があり、漢の張憲が著した『説郛』では「帝仰天嘆曰東方朔生在朕備十八年而不知是歳星哉慘然不樂」(拙訳: 武帝は笑いながら空を挙げてこう言っている。東方朔は私のそばで十八年もいたが、彼がその「歳星」であることが知らなかったのは誠に残念でたまらない) のような記述があり、武帝は東方朔に神様のような存在だと感じられ、非常に高い評価を与えた。また、『漢武故事』では「東方國獻短人。帝呼東方朔。朔至、短人指謂上曰、王母種桃、三千歳一子。此子不良。已三過偷之矣」、つまり西王母が植えた三千年に一度しかならない桃の実を三つも盗んだ。それから、張華が撰述した『博物志』でも「西王母七夕降九華殿。以五桃與漢武帝。東方朔從殿東廂朱鳥中窺之。王母曰、此窺小兒。嘗三來盜吾此桃」と同じような荒唐無稽な逸話が東方朔について創作されている。そして、怪現象の権威とみなされたせいも、伝奇を集めた『神異録』の著者に擬せられた。

一方、日本の能の演目『東方朔』では、朔は仙人として登場する。島根県には、八百比丘尼に斧を磨いて針にすると行って驚かせ、八百年生きていることを聞き出し、自分は九千年生きていると打ち明けた、という伝説がある¹²⁾。山口県吉敷郡には、長寿を自慢する百六歳の三浦大介、八千歳の浦島太郎と出会い自分は九千歳だと自慢するが、三人で旅をしていると三人の出産に立ち会った産婆で七億歳の七億婆と出会い窘められたという伝説がある¹³⁾。

このように、「東方朔」についての伝説は少なくない。陳春生が「東方朔」という名前を利用したことは当時の文学分野に大きな影響を与えただろう。なぜなら、西欧人の名前より中国に元々にある人名は中国人にとって、より覚えやすく、読者との共鳴(への影響力)も非常に強いだろう。さらに、これは宣教師D.MACGILLIVRAY(季理斐)が『伊朔譯評』の序文で言った“I am glad that Mr. Chen, the Chinese editor of the *Christian Intelligencer*, has once more taken up Aesop's book, putting it into a thoroughly Chinese garb, adding morals of his own. I am sure a Chinese could do this better than any foreigner, and it is certain that Mr. Chen's work will have a vastly wider vogue than Mr. Thom's.”(『通問報』の中国人編集者である陳が、イソップの寓話集をもう一度取り上げ、完全に中国の衣服に入れ、彼自身の道徳を加えたことをうれしく感じられる。中国人はこれ(イソップ)を翻訳するのは、他のどの外国人よりも上手にできると確信している。陳の作品はトームの作品よりもはるかに広く流

12) 水木しげる『妖鬼化 第4巻 中国・四国編』 Softgarage 出版、2004年。

13) 松岡利夫『周防・長門の民話 第1集』 未来社、2016年。

行することは確かである。) ことと共鳴していると言える。

2. 宗教性がある語彙の分析

次に『伊朔譯評』における陳春生の宗教観を反映する内容について見ていきたい。『伊朔譯評』で使用された語彙を分析した結果、宗教性がある語彙として以下のものが挙げられる。

- | | |
|--|-----------------------------|
| 8 ¹⁴⁾ , 田夫救蛇……救世 / 救人 | 11, 雞得珍珠……聖經 |
| 13, 獅蜂比藝……撒母耳記上十七章 | 19, 園丁逐兔……孔夫子 |
| 22, 狼狐相罵……孔子 | 23, 獅殺三牛……傳道書 (四章十二節) |
| 31, 狡狐騙鴨……書經 | 33, 漂匠生妒……馬可二章二十四五節 |
| 37, 鴉效鷹能……中庸 | 38, 財神無靈……基督教 / 傳道 |
| 42, 眇鹿失計……孟子 | 44, 鼓手委過……孔子 / 春秋 |
| 46, 鼠妨猫害……孔子 | 48, 牧童說謊……孔子 |
| 50, 野豬自護……孔子 | 54, 杉葦剛柔……老子 |
| 56, 鴉欺羊善……易經 | 57, 指頭露奸……孔子 |
| 58, 縱子自害……孔子 / 箴言 / 三字經 | 62, 狼斷羊案……語云 |
| 66, 狼計不行……孔子 | 67, 車伏求神……上主 / 神 |
| 72, 妒驢取辱……孔子 | 76, 鹿求牛救……孔子 |
| 79, 龜兔賽跑……上帝 / 中庸 | 86, 老蟹訓子……大學 |
| 93, 舟人罵海……耶穌教 / 教案 | 94, 燕鳥爭美……孔子 |
| 96, 羅鳥得鶉……詩經 / 大學 | 100, 賊人何多……耶穌 / 教會 (本文) |
| 103, 兩鷄相鬥……上主 / 主恩 | 106, 笨豬尋柿……上帝 / 聖經 / 神 / 世福 |
| 109, 不見己過……孔子 | 127, 孔雀求歌……上帝 |
| 132, 獵犬戲兔……救主 | 133, 捨羊求命……耶穌 |
| 136, 豬求饒命……神 / 主耶穌 | 138, 兔求狐助……孫子 / 孔子 |
| 139, 鄉人恨鷹……真神 | 142, 鹿何畏狗……上帝 |
| 152, 老農藏金……上帝 / 救主 | 153, 瓶中取栗……論語 |
| 162, 村女擇壻……孟子 (本文) | 163, 人言難聽……詩經 |
| 170, 閉門捉虎……孟子 | |
| 180, 鷄與鷄鬪……耶穌 / 基督 / 聖教 / 天國 / 基督徒 / 邪魔 / 門徒 | |
| 188, 鳥不知機……耶穌教 / 西教士 / 傳道 | |
| 196, 馬允驢食……教士 | 198, 以石為蛋……傳教 / 濟世 / 傳道 |

14) 原文にはタイトルの番号はないが、便宜的に収載順に番号を付す。

199, 脚石填瓶……聖霊

『伊朔譯評』には宗教性がある語彙が用いられている寓話は以上のように、合計50話見られた。列挙したように、「孔子」、「孟子」、「三字經」などのような儒教の語があり、また「上帝」、「耶穌教」、「聖經」などのようなキリスト教的な語もある。以上50話の宗教性語は、上に「(本文)」で記したものを除き、残り全部は教訓の所にある。陳春生はイソップをよく理解した上で、寓話を意識したのみならず、教訓の部分で自分の見解を主張していると言えるだろう。訳だけでなく評こそが陳にとって重要であったため、イソップ本来の題名「*Aesop's Fables*」を「伊索寓言」、「意拾喻言」などと訳さず、『伊朔譯評』の「譯」と「評」と命名したのではないだろうか。

また、「79, 龜兔賽跑」には「上帝」と「中庸」があり、キリスト教的な「上帝」と儒教的な「中庸」が同一寓話に使われている。「58, 縦子自害」には「孔子」、「箴言」、「三字經」が同時に使われている。「箴言」は聖書の中にある言葉で、「孔子」と「三字經」は儒教的な語彙である。全文にはキリスト教的な語が含まれる話は23話あり、儒教的な語が含まれる話は24話ある。その他、キリスト教と儒教両方の語を含む話は2話ある。残り1話は「易經」というものを引用している。当時西欧文化の流入が盛んになった社会背景の上で、以上のような『伊朔譯評』における宗教性の多元的な体現から見て、陳春生の翻訳と宗教観はいわゆる「中西合璧」と考えられるだろう。

3. 教訓の意図するところ

佐藤(1999)によると、戈賓權¹⁵⁾氏は、『伊朔譯評』について、次のように述べている。

訳：光緒三十二年（一九零六）、陳春生は『東方伊朔』一冊を編集し、上海の広学局から出版した。そのなかには『列子』、『莊子』、『淮南子』、『韓非子』、『呂氏春秋』、『苑』、『史記』、『通鑑』などの書中に見える寓言が選ばれているが、それは教会の人厚い歓迎を受け、「誠に道を伝ふるの利器なり」と称賛された。宣統元年（一九零九）には、彼はさらに官話を用い、『伊朔訳評』一冊を編集し、上海の協和書局から出版した。その中にはイソップの二百数話の寓言が収められている。当時「此の書は『東方伊朔』とお互いに相發明するの妙有り。誠に家庭に必ず備へ、蒙を訓ふるに必ず需め、道を伝ふ

15) 戈賓權(1913-2000)は、江蘇の東台で生まれた。彼は1932年に上海大夏大学(現在の華東師範大学)を卒業した。有名な外国の文学研究者、翻訳者、そしてソビエトの文学専門家であり、ニューチャイナの設立後、初めて海外に派遣された外交官でもあった。プーシキン(Pushkin)を中国に紹介し、ロシア作家マクシム・ゴーリキー(Maxim Gorky)による有名な作品『海燕』を翻訳した。中国の中学校の教科書に導入した。

るに必ず読むべきの書なり」と称賛された¹⁶⁾。

戈氏は陳春生の『伊朔譯評』について以上のように評価している。「此の書は『東方伊朔』とお互いに相發明するの妙有り。誠に家庭に必ず備へ、蒙を訓ふるに必ず需め、道を伝ふるに必ず読むべきの書なり」から見れば、『伊朔譯評』にも『東方伊朔』のようなキリスト教的な特徴があると推測できる。「蒙」と「道」が既に宗教的な性格を持ち、民衆に何かの思想を伝えたいという所が特徴である。しかし、戈は『伊朔譯評』の内容について、「其中收了伊索的200多則寓言（イソップの二百数話の寓言が収められている）」¹⁷⁾と記述したが、筆者の調査によると、実際は合計199話のみである。

また、寓話の定義を調べてみれば、『第六版 新明解国語辞典』（三省堂）を引くと、「登場させた動物の対話・行動などに例を借り、深刻な内容を持つ处世訓を印象深く大衆に訴える目的の話」と書かれている。寓話の目的は教訓や真理を伝えることであり、お話そのものはそれらを届けてくれる「運搬手段」である。別の言い方をすると、寓話においては教訓や真理こそがその核であり、お話はそれらを包みこむ「外皮」である。なぜそのような二重構造をとるのか。教訓は苦く、真理は激しいので、そのままでは食べられない。ならば、楽しいお話で教訓や真理を包んで読者に届けようというわけだ¹⁸⁾。

さて、『伊朔譯評』の教訓の意図するところをここで分析したい。内容を見てみると、「囂囂子曰。」という冒頭から始まっている教訓が1話だけある。その寓話と教訓を以下に挙げる。

鼓手委過

戰陣的時候。大概是以鼓聲進。以鑼聲退。這是中外通行的古法。古時某國的軍隊。因打了敗仗。鼓手也被敵兵生擒過去。將要就殺。古手乃哀求道。我不是執刀執槍的兵卒從未殺過一個人。不過只在陣上敲敲鼓而已。豈能定我是死罪呢¹⁹⁾。敵將道。你雖然沒有膽量衝鋒破銳。身臨前敵。但反在躲在後面。任意鼓弄催人上前。豈不是罪更加重麼²⁰⁾。竟將鼓手推出殺了。

囂囂子曰。世上有等人。專門聳人作惡。且又自己不肯居惡人之名。每到受報時。便諉爲無罪。殊不知被聳行惡的人。不過一時直性。受人愚惑。那種種惡蹟。皆是那假善人主謀出來。可知聳人作惡的人。眞眞陰險萬壯之梟雄了。所以。孔子作春秋一書。於爲臣的不肯放寬趙盾。於爲子的不肯放寬許止。皆說他是弑君弑父。就是這宗誅心之法了。俗語說。借刀殺人。

16) 佐藤一好『『東方伊朔（イソップ）』研究序説—キリスト教的性格を中心に』（『日本アジア言語文化学会』通号6、1999年）、121-137頁。

17) 戈賓權『中外文学因縁』（華東師範大学出版社、2013年）、380頁。

18) 戸田智弘「寓話・北風と太陽には「北風勝利」編もある」（東洋経済新報社、2018年）。

19) 本稿で引用した『伊朔譯評』の原文は縦書きであるため、傍点「ヽ」で示されている所を下線で表す。

20) 本稿で引用した『伊朔譯評』の原文は縦書きであるため、傍点「。」で示されている所を文字上記す。

眞可爲鼓手引証。

「鼓手委過」の教訓では「囂囂子曰」が使われている。「囂囂」というのはやかましいさま、さわがしいさまである²¹⁾。ではどうして陳春生はこの1話で「囂囂子」を使ったのだろう。『伊朔譯評』はおおよそ「知白子曰」から教訓が始まっている。「知白」というのは「清廉潔白を知る」という意味であり、それに対し「囂囂」が「喧々囂々」というあれこれやかましく言い立てる様子である。このことから教訓の最後の「俗語説。借刀殺人。眞可爲鼓手引証。」という表現が問題を鋭く指摘していると考えられる。つまり、一般的な道理説明だけではなく、押さえられない感情をアピールできるという効力があり、ここで「囂囂子」を使うことに陳春生の思想が現れていると言えるだろう²²⁾。

陳春生が『伊朔譯評』で1話だけ「囂囂子曰。」を使った理由は、何か特別な意味があったのだろうか。同じイソップ関係のもう一つ陳の作品である『東方伊朔』²³⁾には序文に「囂囂子」があることだけ指摘しておきたい²⁴⁾。「囂囂」が人物を表しているのか、それとも文字通りの意味を示しているか、現時点では定かではないが、上述のようにこれを通じて自分の感情を表そうとした可能性があるとも考えられるため、この問題点について、引き続き検討したい。

そして、『伊朔譯評』の中にもう一つ例をあげたい。「牧童説謊」という寓話は、以下のように教訓で「孔子説」を通じて儒教の思想を伝えている。

牧童説謊

某家の牧童。在山上看守一羣羊。每每戲喊狼來了狼來了。起初的時候。村上的人。聽見他呼救。皆信以爲眞。跑去相救。後來知道他是以此爲戲。所以人聽見他呼救。皆不以爲事。一日眞果來了一羣狼。他又呼叫狼來了狼來了。村上的人。聽見這話。仍以他是戲耍。不去相救。因此羊被咬死的不少。

知白子曰。人生在世。說話總要有信。倘若無信。後來他無論說甚麼話。人皆不能取信。這樣如何與人交往呢。孔子説。人而無信。不知其可也。大車無輓。小車無軌。其何以行之哉。可知人而無信。便是自己欺自己。

21) 『大辭林』三省堂 第三版 2006年。

22) 「囂囂子」に関する著作は『囂囂子歴鏡』があり、清代の胡袞參と清方江が編集した本である。この『囂囂子歴鏡』は天文アルゴリズム系についての書籍である。内容には「歴元」、「太陽購用」、「日時説」、「中星」といった部分からなっている。そのため、「囂囂子」は「知白子」のように陳の自称であるか、或いは誰かを指しているかは確定できない。

23) 陳春生『東方伊朔』（上海広学書局、1906年）。

24) それは「東方伊朔贈詞并序 古潤囂囂子嚴霽青率作於申江澄觀寄廬」と書かれている。

「人而無信。不知其可也。大車無輓。小車無軌。其何以行之哉。」という説は『論語・為政』²⁵⁾の中にある文である。このように孔子、孟子、孫子などの思想家が教訓の中で頻繁に使われている。儒教思想を含む教訓は中国人にとって容易に受け入れられるだろう。寓話の内容は羊飼いが嘘をついたせいで、羊を全部狼に食べられたというものであるが、陳春生はその中から得た深い意味や道理を易しく説明している。「人生在世。説話總要有信。」は道理説明をしており、最後の所の「孔子説」は、この寓話を理解して聖人が言ったことを顧みようと伝えているのである。

さて、『伊朔譯評』はイソップ寓話の漢訳版として、全体的にキリスト教性を生かしている寓話も少なくない。具体的な例を以下のように挙げる。

獅蜂比藝

獅子與黃蜂。大小的分別。真是不能計算。一日有一黃蜂。在獅子面前。飛來飛去。頗為討厭。獅子乃指斥黃蜂道。你這小鬼。膽敢在我面前。如此討厭。但我只要一舉趾。便可使你身如齏粉了。黃蜂道。大王雖然力但無敵。在我看來。終是蠢物。如若不信。不妨過來比較比較。獅子一聽這話。只是止不住的冷笑。黃蜂道。大王不信。何不試試。獅子道不用試試。聽你如何罷。那黃蜂即時飛身起來。或鑽入獅子的鼻中。或鑽入獅子的耳中。那獅子被他刺得疼痛不堪。雖是張牙舞爪。亂踏亂跳。費了許多氣力。也是不能將他逐退。到了精疲力竭。只得甘拜下風。乃得誤事。

知白子曰。世上的人。大概皆是大的能欺負小的。強的能欺弱的。這不過是指著他的體力而言。若是以智力而言。往往小的又能得勝大的。弱的又能得勝強的。所以。以一年幼穉弱的大關能繫殺偉大丈夫柯利亞。(撒母耳記上十七章)以一手無縛雞之力的韓信。能使一拔山扛鼎的霸王。困死在烏江。以一彈丸小島的日本。能使一稱雄世界的俄羅斯。自甘俯首言和。俗説。蜂蠆有毒。又説。秤錘雖小可壓千金。

このように、「獅蜂比藝」では小さな蜂と体の大きい獅子との力比べが描かれている。蜂は飛んでいるとき獅子にうるさいと怒鳴られ、自分を軽減されたことに反発し、結局獅子に勝った。この寓話から、陳春生は「所以。以一年幼穉弱的大關能繫殺偉大丈夫柯利亞(撒母耳記上十七章)」と「以一手無縛雞之力的韓信。能使一拔山扛鼎的霸王。困死在烏江。」、「俗説。蜂蠆有毒。又説。秤錘雖小可壓千金。」のように『聖書』を引くとともに、中国での俗説を引用することによって通俗性を与え、寓話の形として民衆に受け入れやすくしていると言えるだろう。

25) 『論語・為政』第二十四章 第二十二條。

おわりに

陳春生はキリスト教に入会し、宣教師との接触が主な仕事であった。自称の「知白子」から道教思想との関わりが反映されていると考えられる。さらに、『伊朔譯評』の内容には儒教及びキリスト教的な語を頻繁に使っていたことから、陳春生が単一な宣教に夢中になっていたわけではなかったことを指摘することができるだろう。

『伊朔譯評』は、寓話を通じてキリスト教性を生かしている。しかも、陳春生は単に新しいものを民衆に紹介することだけでなく、中国人が既に知っている儒教または道教などの言葉を併用した。さらに、『伊朔譯評』の序文を考察すると、作品の名前「伊朔」は歴史上の大人物である「東方朔」を引用していることがわかった。このことから、「東方朔」は文化的典型と認められ、ギリシャのイソップと同様に重要な地位を占めていることであろうと言える。本稿は「伊朔」の由来と宗教的な語の使用について考察した。当時の社会背景において、西欧文化の流入が盛んになっていた時期に、『伊朔譯評』における儒教とキリスト教に関する語の使用は、宗教性の多元化が体现されていると考えられるだろう。